

この会議のすぐ後…江戸では御用党と名乗る奇妙な盗賊団が横行するようになった。

白昼、数人で徒党を組み商家に押し入ると「御用金」を強要、目的を達すると、こそこそとせず堂々と三田の薩摩屋敷へ帰っていった。

薩摩藩主導で行われているのは分かっているのだが、今事を構えればやっかいなことになる。

幕府側はじっと我慢している。

江戸の治安を守る責任者たる幕府の面子など無いに等しい。

弱腰の幕府側に対し、浪人盗賊団の狼藉はエスカレートしてゆく。

江戸城に放火したり、果ては幕府の留守部隊として江戸の治安を預かっている庄内藩邸に大砲まで打ち込むという始末。

ついに我慢の限界を超えた幕府は、庄内藩に命じ、三田の薩摩屋敷に対して焼き討ちを決行するのであった。

この報は、幕府軍が集結している大阪城に報告され、王政復古、辞官納地の強制などでいきりたっている幕臣タカ派達の火に油を注ぐ結果となった。

「薩賊討つべし」もう慶喜の制止を聞くところではなくなっていた。

こうして 1868 年(慶応四年)正月三日、幕軍からの発砲により鳥羽伏見の戦緒が開かれるのである。

この御用盗事件は、西郷が自藩の益満休之助や草莽の土相楽総三らに命じ実行させた幕府挑発のための謀略であった。

「鳥羽街道一発の砲声は、まさに百万の味方を得る思いでごあした」

後に、西郷はこう述懐している。

ともかく、相手を戦争に巻き込む、次に、大義名分(錦の御旗)を明らかにする、仕上げは正義の敵ということで相手を民衆の面前に晒す。

革命のための常套手段を、骨太に、手順通りに実行している。

沖永良部島の島暮らしの時、部下は性悪ということを前提にした帝王学のアドバイザーとして著名な韓非使を徹底研究したと言われているが、革命というのは、正攻法だけでは成就しないということを熟知している大策士の一面も、きちんと持っているのである。

西郷には、自分がどういう言動をすると、人がどう動くかなどというレベルのことは軽々と見えていたに違いない。

東征大総督府参謀として江戸へ上る時、慶喜の一命を取るのが革命成就の証であると強面に宣伝しておき、幕府側にぎりぎりの譲歩を引き出させ、その上で何事もなかったかのように、江戸の始末を勝に任せてしまう江戸城無血開城など、自分の言動により、相手がどう動くかを読み切っていないてはなかなかできない手際の良さなのである。

こうして西郷主導による明治維新になる。